

国内研修報告書

- ・ テーマ：徳島県 海陽町における 地域での防災活動の取り組みについて
- ・ 研修先：徳島県海陽町
- ・ 期間：2024 年 8 月 7 日～8 日
- ・ 参加人数：4 人

私たちは8月7日から9日までの三日間で徳島県海陽町に行く計画を立てた。研修先を海陽町にしたのは今回一緒に国内研修行ったメンバーが教育と防災、地域に興味があったからだ。そこで地域での防災教育の取り組みを行っている事例を調べたところ、徳島県、特に海陽町は南海トラフ地震に備えて様々な施設を設置し、防災に関する取り組みをしていることがわかった。例えば海陽町に設置されている南部防災館ではファミリーで防災を学ぶ講座を行ったり、小学校で出前授業を行っている。また海陽町にある県立海部高校では地域の高齢者の家を訪問し不要な家具の処分を行うなどのボランティアを行っていた。そうすることによって災害時に地域のために活動する意識を高めているようだ。このような活動から徳島県海陽町では地域全体で防災教育を行う取り組みがなされていると判断し研修先を決定した。

私たちは新宿駅から夜行バスで大阪に行き、そこからさらに高速バスに乗って徳島駅に向かった。夜行バスの遅延により大阪駅でのバスの乗り換えができなかったため急遽別の高速バスを予約した。南部防災館への訪問が時間的に難しくなったため徳島駅からバスに乗って東部防災館に行くことにした。

私たちは東部防災館の職員の方にお話を伺った。徳島県立東部防災館は普段はおきのすインドアパークという名前で周辺住民が利用する施設として営業している。もともとは新聞の印刷工場だったが5、6年前に閉業する際に施設が県に寄贈されたそうだ。おきのすインドアパークは南海トラフ地震が起きた際に大きな被害が出るのが予測されている徳島県の物資の輸送拠点、さらに地域での賑わいづくりの拠点としての役割を期待されてできたそうだ。新聞の印刷工場であったため室内が大きく設計されているという特徴を生かした施設となっていた。屋内型のスケートリンクがあり、訪問した際も夏休み中の中学生が利用していた。また子供向けの英語教室や子供も食べられるメニューを提供しているカフェが併設されていた。またイベントスペースとして部屋を貸しだしており、阿波踊りの練習や各種講演会、子供会のイベントにも利用されている。子供、中高生、子育て世代さらに社会人とすべての世代の人が日常的に利用できる施設であった。緊急時には物資の輸送拠点として活用することを想定されているようだ。多くの支援物資が東部防災館に一度集められ、そこから徳島県の各地に分配されて輸送される仕組みになっている。災害時にはメディアで報道される場所ばかりに物資が偏ってしまうことが多いため、東部防災館のような施設があることによって徳島県の多くの避難所に必要な物資を届けることが期待されている。職員の方によるとおきのすインドアパークは海がとても近いので、その立地を生かして周りには工業団地が多く建っている。工業団地に勤めている人々は津波が発生した際の一時避難場所としておきのすインドアパークを認識しているが、ほかの周辺住民の人は避難施設として認識している人は少ないようだ。私はその話を聞いて、災害時の一時避難場所とされている場所を普段から利用することによって非常時の不安要素が減るのではないかと考えた。普段意識していなくても災害時に一時避難する場所が地域活動の拠点として機能している施設であることによって、地域の人々が自然と共通の場所に集まることにつながり、避難場所に知り合いがいる安心感を生み出すことができる。また、子供たちも普段から慣れ親しんだ場所で近くに住む友人たちと緊急時でも会うことができることで少しでも落ち着くことができると考えた。

私たちはおきのすインドアパークを出た後、海陽町を目指して牟岐線に乗ったがその途中で日向灘を震源とする地震が起きた。そのため阿南駅まで来たところで運行休止になってしまい、電車を降りることになった。何とか宿泊先の宿がある阿波海南駅まで行こうと阿南駅からのバスを探したが、南海トラフ地震臨時情報が発表されたことによってバスも止まってしまっていた。そのため目的地であった海陽町へ行くのを断念し、阿南駅の付近で宿をとった。その時に感じたのは温かい食事の安心感だ。全く知らない土地で、前日からコンビニエンスストアで買ったものしか食べていなかったこともあって、ホテル近くの飲食店で食べた食事がとてもおいしく感じられた。地震などの災害時でも温かい食事が食べられることは不安を取り除くことにつながるのではないかと肌で感じる事ができた。次の日は徳島駅から高速バスで大阪まで出て新幹線で帰ることができた。

目的地であった海陽町に行けず教育委員会の方へのインタビュー調査が行えなかった代わりに9月26日にオンラインで聞き取り調査を行った。そこでは主に2013年に海陽町立穴喰中学校で行われた防災キャンプについて聞き取りを行った。役場の住民環境課の方、海陽町教育委員会の次長で当時穴喰中学校の担任だった方、当時穴喰中学校の教頭だった方にお話を伺うことができた。今回協力してくださった方によるとこの防災キャンプは徳島県の防災キャンププロジェクトの一環として行われたそう。東日本大震災の発生によって防災への意識が高まり、県の防災キャンププロジェクトが始まった。実際に東日本大震災で活動をした自衛隊の方をゲストとして迎え、中学生に向けた講演会を行った。その費用は全体で50万円ほどかかったが県のキャンププロジェクトの助成金でほとんどをカバーすることができたそう。参加人数は約50人で役場の職員や中学校の教員の他にも婦人会や日赤奉仕会などの地域住民の方々もボランティアとして参加していたそう。中学校から少し離れたところにある老人ホームにはお風呂があるため、そこを借りるために夜間移動教室も行われた。それも老人ホームの職員の方が好意で引き受けてくれたそう。その話の中で印象に残っているのは地域の子供を地域の大人が、地域全体で大事にするという言葉だ。この防災キャンプができたのは地域の方が子供たちのために行動をしていたからだと感じた。防災キャンプだけでなく普段から地域と学校が一緒に子供たちを見守る体制ができているからこそ、このように様々な機関が円滑につながることができるのだと思う。このような防災キャンプはこの限りであったが穴喰中学校では学期ごとに避難訓練を行ったり5月に行われるオリエンテーションは中学校の近くの避難所で行われたりと引き続き防災教育が行われているそう。また海陽町全体でも防災への取り組みが行われている。日が明ける前に発生した昭和南海地震の反省を生かして、毎年12月には地区ごとに明け方に避難訓練を行っている。近年ではどんどん時間が遅くなってしまっているため改善が必要だとおっしゃっていた。他には町の職員全員で災害自主訓練を行ったそう。その時は津波が起きることを想定して避難場所の確認を行ったり、役場の職員一人一人が仕事の時間以外で差異が起こった時にどのような役割をするのかを確認したそう。

私は今回の聞き取り調査を通じて防災キャンプ事業は防災という観点からも地域全体での教育という観点からも効果的であると感じた。一方で改善点もあると考えた。その一つが定期的な防災キャンプの開催だ。この時の防災キャンプは県の防災キャンププロジェクトによって開催されたため、その時限りのモノであった。今回の聞き取りでもっと地域住民の方を巻き込む必要があったという反省をしていらっしゃるのを聞いて、ほかにも様々な改善できる点があったのではないかと感じた。定期的に防災キャンプを行うことによってさらに質の高い訓練にしていくことが可能になると考えた。

最後に今回の国内研修は様々なハプニングが多くあり当初の計画通りにはいかなかったが南海トラフ地震臨時情報が研修中に発表されたことにより、身をもって普段から防災への意識を高めていくことが大切だと感じることができた。また当初オフラインで聞き取り調査を行う予定だった海陽町教育委員会の職員の方々に後日お時間を作っていただいたことに感謝したい。